



【住・職・閑・話】

毎年、8月はお寺の行事などでとても慌ただしく、忙しい日々を過ごしていますが、今年

はそれに輪をかけて記録的猛暑が身体を消耗させました。連日、その暑さを競うようなニュースを目にするたびに、地球の温暖化もいよいよ待ったなしのところまできたなと感じました。

この時季、人と会うたびにその暑さの話題になるのは皆さんも一緒だと思いますが、ある法事の席で門徒さんから「お坊さんは普段から厳しい修行しているから(この時点で大きな誤解があるのですが...)この暑さにも耐えられるでしょう。心頭滅却すれば火もまた涼し、言葉もありませんからね。」と言われました。

8月の行事報告 August 子ども合宿

今年の子ども合宿は子ども37人が参加、壮年会からは4人がお手伝いいただきました。開会式に始まり、毎年恒例のパーベキュー、花火、ゲーム大会などにも今回は「いのちのかたち」というテーマで体験学習を行ない、車イス体験や目の不自由な方の誘導方法、老人疑似体験をしてもらいました。



禅を組むには、必ずしも山水の地を必要としない。無念無想の境地に達すれば、火もまた自ずと涼しく感じるものだ」ということ、つまり、「苦しいことでも捕らえかた、考えかたによって感じかたが大きく変わる。」ということを示しています。

私には心頭滅却することも出来ませんし、読経をしてもあれやこれやと雑念が出てきます。しかしこの煩惱丸抱えの私が、阿弥陀さまの智慧のおはたらきによって、自分中心の生きかたから新しい価値観・生きかたに気づかされて転換されていくのがお念仏の世界です。

苦しみから逃げ回る人生から苦しみと共に歩む人生、まさにその人生を送られたのが、鈴木章子さんです。若くして癌の告知を受け、転移を繰り返しながらも多くの詩を残し、お念仏を喜ばれました。その中の一つをご紹介します。

【変換】

死にむかって 進んでいるのではない 今をもらって生きているのだ
今ゼロであって 当然の私が 今生きている
ひき算から足し算の変換 誰が教えてくれたのでしょう
新しい生命 嬉しくて 踊っています (詩:鈴木章子)

共に支えあっていくこと、人を思いやるところに少しでも気づいてもらえるように努力しました。少しずつ学生スタッフ(高校生や大学生)も増えてきましたが、入浴の際や布団の片付けなど、まだまだ壮年会の会員のお力を必要としています。来年には今年以上にお手伝いいただけますようお願い致します。(住職 記)

壮年会だより

平成25年9月度 中原寺仏教壮年会だより Vol. 10



秋の候、猛暑に続く残暑もさり難い日々ですが、皆様にはおかわりなくお過ごしのことと申します。7月には恒例のファミリーパーティー(第22回)が盛大に開催され、8月には盂蘭盆会法要が行われました。1000兆円超の財政赤字を抱える日本の安倍政権には、今秋、庶民生活に直結する消費税増税への決断が迫られています。7年後の東京オリンピックの開催が決まりましたが、目先にあまりとらわれる事なく「如来の智慧の海は広く底がない(法語カレンダー)」を信じ、阿弥陀様の本願にお任せする世界をお誓いしましょう。

5月の行事報告 Mey

5月19日(日)【降誕会および門信徒総永代経法要について】午前11時

11時、親鸞聖人降誕会法要の开幕式です。いつもは行事鐘ですが今回はパイプオルガンの音色が流れ、まず婦人会の人たちの献花・献灯です。お勤めは「讃仏偈(さんだんのうた)」、讃仏歌は「宗祖降誕会のうた」です。

法話: 栃木県慈願寺住職 池田行信師
講題「法としての念仏」

「法」とは、因果 = 「自因自果」「自業自得」 = の道理である。
他因果論 結果が悪いと他の責任にする
運命論 自分の因果の道理を運命のせいにする
宿命論 あらかじめ(前もって)原因を決めていること、例えば厄(わざわい)これらはいずれも迷いがあるからである。つまり法(因果の道理)という原理にのっとりて日暮らしをしていないからである。

念仏は呪文でもまじないでもない。
“お念仏”の確認

- 音 訊 意識
ナ モ 南 無 歸命(より)かかれます、おねがいします)
アミダ 阿弥陀 無量光(計りきれない光り)無量寿(計りきれない命)
ブツ 仏 如来(悟り)を得た人、一如(さと)りの世界から来た人)

お念仏は、「因果の道理に迷わない生き方をさせて頂く、仏になる世界に生きる」ということ。

午後1時 門信徒総永代経法要です。行事鐘がなり、お勤めは「正信念仏偈」です。法話は、午前に引き続き、池田行信師です。講題「宗教心の原点」

宗教心の原点の一つは、生老病死の不安、別の角度で見ると自己とは何ぞや」というテーマに行き着く。われわれは、理性に基づく自由意志と自己決定権を絶対なものとしている。ところが自分では計らうことのできない自分にぶつかる。この課題を自分で担うことができなくて迷うか、担うことができたら

れるか。この時、我にとられない = 無我である。つまり自分の自由意志の及ばない私の在り方をどう担うことができるのか。そのことによって生老病死の不安を超えていく。我を無くすととらえていかねばならない。自由意志と自己決定で解決出来ない問題、急激な状況の変化に対応できなくなり、最悪のことを想定する、これが不安の原点である。その最たるものが死である。自由意志で自己決定出来ないものは素直に認めなければならない。そのまま担う心、それが無我である。

金子大栄師は、「いつ死んでもよし、いつまで生きても飽きの来ない命、そうゆうふうな命を生きましよう」と述べたが、これは無我の境地だと思ふ。また別の視点では、限りある命に気づくことである。ここに“南無阿弥陀仏は無我にて候”という世界が課題を担っていると知ることができる。

もう一つの原点は、罪責感、自分を責めるという状況に追い込まれるということである。自由意志で自己決定出来ない事象に責任を感じ苦しむことである。例えば犯罪の被害者が罪責感で苦しむ。このような事象をどう担うか。それは無我の境地になることであり、如来様にお任せする世界を築くことである。ここに仏教でいう「共業」という世界がある。

つまり加害者の業と被害者の業とを共にすること、自由意志で自己決定出来ないものを受け入れ共にできたとき、それは無我であり、共業の世界が開かれたとき、人間は救われるのである。先に述べた不安とこの罪責感、無我という仏教の構造のありかたに収まるのである。

このように書いてしまうと、池田先生の講話は難しく無味乾燥な印象を与えてしまいますが、実際のお話はユーモアたっぷり、また豊富な実例を示され本当に面白いお話でした。

また、後片付けがかわって、婦人会と壮年会の有志が、池田先生、前任職、住職を交え懇談しました。先生はお酒も強く、談論風発、誠に愉快なひと時でした。

以上



編集後記 壮年会だより:平成25年9月号

今回も、多くの方々のご投稿により、充実した紙面とすることができ誠にありがとうございます。12月発行予定の次号も、皆様のご投稿をお待ちしていますのでご協力、よろしくお願い致します。



平成25年度千葉組仏教壮年会総会及び研修会報告

千葉組仏教壮年会総会及び研修会が平成25年6月2日（日）に県下13ヶ寺40名の参加者の参加を得て千葉市民会館に於いて開催されました。中原寺から麻木さん・越田さん・石井が参加を致しました。総会では前年度の事業報告と決算報告及び監査報告に基づいて採決が行われ、全会一致で承認を受け、引き続き、本年度の事業計画（案）、予算（案）が提案され、審議の結果、全会一致で可決承認されました。

今回、事業計画の中で、平成23年3月11日の東日本大震災から2年余りが過ぎ、未だに多くの方がそれぞれの立場の中で、悩み苦しんでいらっしゃる事が報道される度に胸の詰まる思いがします。

千葉組仏教壮年会では、限られた時間ではありますが、大震災後の復興状況や被災者の皆様方の生活状況、悩み、苦しみ等を実際にこの目で確認をし、今後のそれぞれの支援活動の参考にするために一泊研修会を計画しました。

千葉組仏教壮年会「一泊研修会」

【1日目】福島県復興支援宗務事務所を訪ね、原発事故で避難を余儀なくされた、ご住職方からお話を聞きます。（泊：いわき湯本温泉）

【2日目】福島・北茨城方面の震災跡地を巡った後、親鸞聖人縁りの浄光寺を訪ねます。

開催日程：平成25年10月21日（月）～22日（火）

募集人数：40名（先着順）

参加費：23,000円

問合せ：中原寺壮年会 石井まで（090-3686-2072）

研修会は、浄興寺住職の渡辺恒行様に『仏道に生かされる』仏教徒として。浄土真宗の門徒として、如何に命を見つめ、如何に生かされて生きるか。をテーマで講演を受けました。

（石井会長 記）



写真提供：石井 保

人は何故苦しむのか？
それは皆が自分勝手だからである。ブッダも言っている。「天上天下唯我独尊 三界皆苦我当安之」と。人は結果から物事を判断する。結果には原因があるにも関わらず原因の因はみえないものだ。従って苦しみの結果だけを受けることとなる。苦しみの実体があるの
かないのか？

むかし「切一切有部」という仏教の大宗派があった。かれらはあらゆるものは存在するとしたがはたしてそうなのか？故郷に家族で帰って、サンショウウオを見て私は天然記念物と思うが、息子は皆に自慢できる、ラッキーといい、父はなんと美味しかったという。

実体はひとにより異なる「空」である。つまりこだわっても見えてこないものがある。そんなにこだわることはないのだよと釈迦もいっている。（はじめての文化講演会でひろさちやさんも、「こだわるな」と盛んに言っていたのを思い出しました。）わたしたちは実体のないものにこだわり、判断をくだし、優先順位をつけ日々生活している。それを分別のある人というのだろうか？「阿弥陀様はおぼれている人を救う」という。年寄りから救うのか、子供から救うのか、人が考えると難しい。でも仏様は分別しないのである。だから「無分別」というのだ。「唯我独尊の自分を見つめつつ、人の物差しをあてにしすぎず生きることが、新しい自分をつくるかもしれません。」と、浄興寺の渡辺住職は話されました。

渡辺住職は、胆石を取って退院したばかりの体でありながら、痛さを堪えながら情熱を持って話される様子を年寄り三人は感動して、帰り道酒を飲みすぎました。

（越田 修二郎 記）



感話
シリーズ10

【中原寺ご旧跡参拝旅行に参加して】

初日、6月2日は越中五箇山赤尾町の大谷派の行徳寺へ参拝、行徳寺の坊守さまからお話を頂きました。行徳寺は蓮如上人のお弟子で妙好人として名高い赤尾の道宗さんが開祖で、越中五箇山の隅々まで浄土真宗の教えを広める道場としてお寺を建立されました。赤尾道宗師は「道宗の心得二十一箇条」を文亀元年12月に記されています。道宗師は4歳にして母をなくし、13歳の時父に別れ、その後叔父に養育されました。ある日小鳥が巣を作り雛を育てているのを見て、“小鳥でさえ親鳥に守られているのに自分はなぜ親がないのであろうか”と悲しみ、子供心にも親を慕う切ない思いに明け暮れたと、また後生の一大事の聞法求道の道を命がけで歩み続けた道宗師のことを坊守さまが諄々とお話なされ、思わずわれわれの目頭が潤んだことでした。

初日の宿泊は相倉合掌集落の「民宿なかや」さんで、夕食は美味しい山菜料理に舌鼓、お酒は美味しい地酒にほろ酔い気分、なかやさんのご息も参加されている、こきりこ節などの郷土民謡と踊りの素晴らしさに感動した一夜でした。

2日目、お朝事はなかやさんの近くの阿弥陀堂で、前住職の調声による正信偈の唱和とその1日が始まりました。その後、黒部宇奈月浦山の本願寺派の善巧寺へ参拝しました。21代目の住職、雪山俊隆師が善巧寺の歴史を話されました。550年の歴史のある寺院で11代僧侶を育成する塾を開き、その流れを「空華派」と称し、門弟は3000人を育成されたと伝えられています。また20代の前住職は児童劇団「雪ん子劇団」を開き日本各地の寺院・子ども会等で公演され、その他の文化活動も積極的に行っています。昨年完成したお内陣の天井絵が素晴らしく、360度パノラマの立山連峰と鳳凰と共命鳥そして富山の花木28枚を合わせ248枚です。360度の中央の空間は蒼い空かあるいは碧い富山湾か、見る方の想像とのことです。

午後は、「日本三大渓谷」「日本の秘境百選」に選ばれた雄大な自然を味わえる黒部渓谷と有名なトロッコ電車です。黒部渓谷は日本一深いV字渓谷でそこを縫うように走る小さなトロッコ電車、手つかずの大自然に感動でした。思っていたより意外とスピードを出しているのには驚きです。残念ながら夏の薄着でトンネルの中では少し寒さを感じましたがいい経験を致しました。

2日目の宿は宇奈月温泉、ホテル「延対寺荘」で一泊。宴会はカラオケで、皆さんののど自慢、美声を楽しませて頂き、よき一夜を楽しみました。

3日目は魚津埋没林博物館と海の屋気楼館を見物。快晴の富山湾を眺めて屋気楼の出現を期待しましたが現れず残念でした。屋気楼は4月～5月頃に現れる事が多いそうで、6月にはちょっと無理の様です。

いよいよ帰路に。長野新幹線上田駅までの観光バスの車中で、日本の唱歌「夏の思い出」「茶摘み」「夏は来ぬ」等々を皆で合唱。皆さんの普段からの行いがいいのか天気も良く有意義な3日間の旅を楽しませて頂き、お念仏のお陰様で、有り難う御座いました。 合掌

（村田 太喜夫 記）



うらぼんえ 盂蘭盆会とは？：ワンポイント解説

「仏弟子の目蓮尊者が、餓鬼道に墜ちた亡き母を救おうとして、その母に食物を与えるが救われず、お釈迦様のお導きで衆僧に供養して、初めて救われた（その日が7月15日）」という故事から起こった行事。私たち仏教徒は「亡き母や特定の先祖に供物を捧げること」だけではなく、「自らが深く仏法に帰依し、限りない仏様のおはたらきを仰いでゆく（感謝する）こと」が大切です。なお「盆踊り」は、目蓮尊者が、母が救われたことを躍りあがって喜んだ姿に由来する、とも言われています。

盂蘭盆会は、盆会・お盆・歓喜会とも言われ、期日は多くは7月13日から16日までですが、お盆休みや農作業等の関係から8月に行われることもあります。（参考：「浄土真宗・仏事のイロハ」本願寺出版社2007年9月）、「岩波仏教辞典第二版」2010年11月）